

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月31日現在

機関番号：23803

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2011

課題番号：20720005

研究課題名（和文） 日本における「死者」の観念をめぐる倫理思想史的研究～神仏観念との関わりを中心に～

研究課題名（英文） Study of the idea of "the dead" from a viewpoint of Japanese history of ethical thoughts

研究代表者

吉田 真樹（YOSHIDA MASAKI）

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20381733

研究成果の概要（和文）：本研究では倫理学・日本倫理思想史の観点から「死者」について、古代では『古事記』が死後の靈魂を極力叙述せず、『日本霊異記』が仏教教義に反して死後の靈魂を前提としたこと、中世では『源氏物語』が生霊と死霊とを恋において連続的に把握し、謡曲が成仏を望む死霊と望まない死霊を設定したこと、近世では平田篤胤が庶民仏教の死後靈魂観に対抗して神道に死後の靈魂を導入し、近代の排仏的柳田國男と親仏的折口信夫の靈魂論を準備したことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：In order to consider the meaning of "the dead" from a viewpoint of Japanese history of ethical thoughts, I discuss the following issues.

In the Ancient times, *Kojiki* myth was very careful not to describe the soul of the dead, while *Nihon-Ryoiki*, the first anthology of Buddhism tales dared to introduce the soul of the dead even against Buddhism doctrine.

In the Middle times, *The Tale of the Genji* showed that the soul of a living woman Rokujo-Miyasudokoro, who loved Hikaru-Genji too much, left her body, and as its extension turned into the soul of the dead. And Noh stories had many variations but they eventually fall on (between) the following two categories; i.e., one in which the soul of the dead hopes Buddhahood as salvation, and the other in which the soul does not hope that way.

In Edo period, one of the Kokugaku leader HIRATA Atsutane brought the idea of the soul of the dead into Shintoism, which was a part of his anti-Buddhism movement and which was deeply succeeded by New Kokugaku(YANAGITA Kunio with anti-Buddhism and ORIKUCHI Shinobu with pro-Buddhism) in the Modern times.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度	0	0	0
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

研究分野：日本倫理思想史

科研費の分科・細目：哲学、哲学・倫理学

キーワード：死者、靈魂、神、仏、古事記、日本霊異記、源氏物語、平田篤胤

1. 研究開始当初の背景

「死」の問題は、人間存在の根底を問う倫理学における最重要の問題である。「死」が、論理によって解き難い問題であることは勿論であるが、では改めてそれがいったい何であるのかを示すことは極めて難しい。それは「死」が非合理性をもつものであることに起因するとさしあたり考えられる。「死」の非合理性の領域は、近代人の我々にはそれ自体捉え難く、取り扱う際には必然的に空理空論に陥り易くなってしまいうため、具体的ないし歴史的な観点を武器として考察することが望ましい。つまり、「死」の問題にこそ倫理思想史的考察が必要不可欠なのである。

ところが、日本倫理思想史研究においては、これまで「死」の問題についての蓄積が殆どないに等しい。和辻哲郎の『日本倫理思想史』においては、「死」は原理的に排除されているとあってよく、また相良亨の日本倫理思想史研究においても、『葉隠』などにおける「死」の覚悟の問題を除けば皆無に等しい。「死」の覚悟論は、「死」の意識化の問題として、「死」の問題の一端を担うものであったが、特にこの点を重点的に継承しようとした西村道一ですら「死」をめぐる数本の論文を残したのみであった。近年の佐藤正英の『日本倫理思想史』は、「くたま」神」という独特の概念によって死後の霊魂を扱う道を切り開いたが、未だ十分に展開しているといえない。

以上をふまえ、本研究では、佐藤の「くたま」神」という方法概念が、「死」の問題を切り開いたことに示唆を受けて、「死者」という方法概念を立てることによって、「死」の問題を考えてゆこうとするものである。「死」を「死」そのものとして扱うのは容易でなく、これまでの論者においてもハイデガー等の既存の枠組にすぐに取り込まれてしまうことが常であったため、具体的な形象をもった「死者」という概念で「死」の問題を問うてゆくことにする。「死者」において「死」を捉えようとする試みは、死後の存在を通して「死」を理解しようとしてきた思想史の実態に即したものであり、殆ど手つかずで残されている極めて豊富な「死」のイメージを掘り起こすことによって、従来の「死」のイメージを刷新することが見込まれる。

## 2. 研究の目的

(1) 日本の伝統思想における「死者」についての通史的なイメージを構築することによって、現代日本人が抱いている「死」及びその裏側にある「生命」の観念の根を明らかにする。従来の日本倫理思想史において決定的に不足しているその種の業績の集中的な生産・蓄積を行う。

(2) 日本の伝統思想における「死」及びそ

の裏側にある「生命」の観念の通史的展望をふまえ、現在の哲学・倫理学の次元において決定的に欠如している日本的な「死」及び「生命」概念を新たに定式化する基盤を作る。

(3) 様々な思想の交渉関係を視野に入れた立体的なテーマ別の日本倫理思想史通史の骨組を獲得する。全体的な視野をもつことによって、日本思想における原理的な基底を探り当て、そこで得られた統一的な観点から諸思想を新たに位置づけることが可能な通史を構想する。

## 3. 研究の方法

日本の古代・中世・近世・近代それぞれの時代において、①「神」の思想、②「仏」の思想、③「庶民」の思想のうちから代表的なテキスト（及びその周辺資料）を選び読解することによって、日本における「死者」の観念を具体的に浮き彫りにしてゆく。その際に、テキスト読解だけでは知り得ない部分を補うため、テキストに関わる寺社・霊場・墳墓等の現地調査（景観調査・神体仏像調査・資料調査）を並行して行う。以上をふまえ、年度ごとに各時代の「死者」イメージについて小括を行い、最終年度にそれらの成果を総合して、「死者」についての通史を構築する。

具体的な工夫として、古代から近代までの全ての時代を覆い、文芸作品から思想書までの幅広いテキスト群を押さえ、日本の倫理思想史全体を視野に収める点に、本研究の独自性がある。従来殆ど取り上げられていないが倫理思想史的に価値が高いと予想されるテキスト群を多く取り入れるように工夫している。また、人気の高い『万葉集』、『源氏物語』、能（謡曲）、歌舞伎作品について、倫理学・倫理思想史の立場から考察を加えることは社会的意義の大きいことである。

## 4. 研究成果

古代日本については、まず『日本霊異記』の「死者」黄泉がえり説話の前提となっている霊魂観について解明し論文発表した。これは従来不明であった、なぜ仏教的要素のない上巻第一説話が、最古の仏教説話集である『日本霊異記』の冒頭に置かれているのかという問題を解明したものだが、さらに巨視的にいえば、仏教学研究で否定的にのみ扱われてきた、「日本仏教の前提としての死後の霊魂」という問題を改めて明確に捉え、積極的に評価すべきことを提示したものである。

次に、『万葉集』挽歌における「死者」について考察し、倫理思想史的に未開拓の分野への研究視角を得た。『万葉集』挽歌には二つの始まりがあり複雑な構造をもつが、あく

まで仏教以前の「死者」ないし「死後の靈魂」のあり方において挽歌を開始したうえで、改めて聖徳太子を呼び起こし仏教的な鎮魂様式をもちこむ構造となっていることが明らかとなった。その一部についてはカルチャー・センター（講座「日本人にとって靈魂とは何か」全2回）で発表した。

さらに、『古事記』の靈魂について、佐藤正英の『古事記』研究の集大成としての『古事記神話を読む』を詳細に検討・批判し、アマテラスを「たま神（死霊）」とする佐藤説を乗り越えるための考察を行った。その一部について招待講演会（演題「靈魂のゆくえ」）、カルチャー・センター（講座「『古事記』神話の思想を読む」全3回、「神道の靈魂観」全2回）及び科研費研究会で発表した。現代神道、特に神葬祭の靈魂観や、考古遺跡、古代仏教の靈魂観等をふまえ、『古事記』が細心の注意を払って死後の靈魂を回避し触れないようにしていることを明らかにした。以上については論文化の準備をしている。

中世日本については、まず謡曲『敦盛』・『八島』における「死者」鎮魂のあり方の二極について考察した。『敦盛』ではひたすらに自らの救いを求める敦盛の靈魂と敦盛をこそ救おうとする直実の呼応が見られるのに対して、『八島』では救われる気のない義経の靈魂と救う気のない旅の僧の呼応が見られる。「死者」の鎮魂を主題とする他の謡曲群はこの二極の間に位置づけられうるという展望を得た。以上をさらに巨視的に捉えていえば、救済を必要としない者の存在は、仏教を不要とする反仏教的系譜に連なる者の存在を示すものであるといえる。

次に『源氏物語』の「死者」について、玉鬘物語を素材として科研費研究会発表（「玉鬘の宿世—『源氏物語』「藤袴」巻・「真木柱」巻）を行った。玉鬘が大宮という死者を背負い始めることで、そもそも夕顔という死者を背負っていたことを呼び覚ますことなどについて発表した。また『源氏物語』における死霊の前提となる生霊について考察を行い論文化した（「六条御息所の生霊化の基底について」、2012年刊予定）。これは六条御息所論として、生霊の側から死霊を考えるための道筋を示したものである。

他に靈魂としての八幡神の性格、『往生要集』における教義遵守のための靈魂の非記述、について問題視角を得た。

近世日本の「死者」については、『平田篤胤-靈魂のゆくえ』（日本倫理学会より和辻賞（著作部門）を受賞）を公刊し、本研究の成果の一部を同書に収めることができた。

同書は平田篤胤の死後靈魂論について、古代日本の「死者」の思想と対照させながら考察を行い、その倫理思想的意義を明らかにしたものである。篤胤が日本神話における

「死者」観をふまえ、火神（ホノカグツチ）の出産場面に特に注目した思想家であり、火神にこそ生命および死の根源を見ていたことを明らかにした。また篤胤が『古事記』的なイザナミ神に由来する死の穢れを否定していること、及びそれに伴って穢れの根源が篤胤においては見失われていることを明らかにした。このことは、篤胤における靈魂の重視及び肉体（死体・物）の軽視と連動するものであり、逆にいえば古代日本の「死者」の思想においては、肉体（死体・物）が重視されているということが明らかとなった。さらに同書において、篤胤が古代以来の仏教における「死者」観を覆そうと試みていたことを、仏教思想をふまえてつづ明らかにした。

他に、和辻哲郎が『歌舞伎と操り浄瑠璃』で重点を置いた古浄瑠璃作品『阿弥陀の胸割』を通時的観点から再検討し、論文発表した。そこでは身施として「身を捨てて死ぬ」菩薩こそが庶民が抱いた仏の姿であったことを明らかにし、「死者」や「仏」の観点からの新たな通史構築の必要性を説いた。また『死霊解脱物語聞書』における業の転変についても考察した。

また、近世日本の「死者」を正しく捉えるために、通説化している和辻思想史図式を批判的かつ具体的に乗り越える作業を行った。和辻思想史図式の最大の問題点は、「近世は儒学の時代である」とする図式によって、近世庶民のもった仏教思想を隠蔽することにある。これは大きく捉えれば、近代特有の偏向の一つの現れといえるが、特に和辻においては極めて屈折した形で現れるものである。即ち、和辻の思想史研究の集大成である主著『日本倫理思想史』においては、近世庶民仏教思想を隠蔽していながら、他の著作において、倫理思想史ではなく芸術史という新たな異なる文脈を与えつつ、その枠内では近世庶民仏教由来の諸芸能を称揚するということがあるのである。この背景に、和辻のもう一つの主著『倫理学』における「死」の隠蔽がある。和辻の思想史図式は、思想史研究者に対して強力な呪縛力をもち続けて現在に至っており、これらの点が克服されない限り、新たな思想史叙述は不可能である。以上について2本の論文を発表し、もう1本の論文化の準備をしている。

近代日本の「死者」については、柳田國男の『遠野物語』、『先祖の話』、『巫女考』及び折口信夫の『死者の書』を中心に考察した。柳田が仏教を排除して身近な死霊の学と化し、折口が仏教を昇華して超越的な死霊・神霊の学と化したという見通しを得た。

以上から「死者」についての通史の枠組みはほぼ見通せているといえるが、今後不足の点を補って調整を図ったうえで、早い段階での書籍化を目指したい。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

吉田真樹「六条御息所の生霊化の基底について」、『季刊日本思想史』(ペリカン社)号未定、査読有、2012年9月(予定)、頁未定(約20000字)。

吉田真樹「倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」、『国際日本学』(法政大学国際日本学研究所)第9号、査読無、2012年、69～78頁。

吉田真樹「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し(中)～『阿弥陀の胸割』を中心に」、『思想史研究』(日本思想史・思想論研究会)第14号、査読無、1～9頁、2011年、1～9頁。

吉田真樹「近世庶民仏教思想と和辻思想史図式の捉え直し(上)」、『思想史研究』(日本思想史・思想論研究会)、第12号、査読無、2010年、1～11頁。

吉田真樹「『日本霊異記』冒頭話の孕むもの(下)」、『思想史研究』(日本思想史・思想論研究会)、第11号、査読無、2010年、1～9頁。

吉田真樹「カオナシのゆくえ」、『本』(講談社)、2009年2月号、査読無、2009年、52～54頁。

〔学会発表〕(計4件)

吉田真樹「霊魂のゆくえ」、全国教育関係神職協議会全国大会、2011年8月5日、静岡県神社庁(静岡市)。

吉田真樹「倫理学・日本倫理思想史の観点からみた「日本意識」、法政大学国際日本学研究所「国際日本学の方法に基づく<日本意識>の再検討—<日本意識>の過去・現在・未来」プロジェクトのアプローチ①「<日本意識>の変遷—古代から近世へ」2010年度第1回研究会、法政大学市ヶ谷キャンパス80年館7階会議室・角、2010年10月9日。

吉田真樹「『霊の真柱』における天・地・泉—死の空間の近代化」、日本思想史学会2008年度大会パネルセッション「日中韓における洋学の伝来と「天」観念の変容」、愛知教育大学、2008年10月19日。

吉田真樹「平田篤胤對於「死」的空間之論述——與「天」・「地」・「泉」的關係(陳昭心訳。日本語タイトル「平田篤胤における「死」の空間—「天」・「地」・「泉」との関わりにおいて)」、国際學術研討會「天、自然與空間」(日本「東亞的文明衝突與“天”觀念的演變」研究班・國立清華大學人文社會研究中心・國立臺灣大學中國文學系共催)、台灣大學、2008年9月25日。

〔図書〕(計1件)

吉田真樹『平田篤胤—靈魂のゆくえ』(単著)、(菅野覚明・熊野純彦責任編集「再発見日本の哲学」シリーズ)講談社、2009年、275頁。  
(本書により2009年度日本倫理学会「和辻賞」(著作部門)を受賞。)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

吉田 真樹 (YOSHIDA MASAKI)

静岡県立大学・国際関係学部・准教授

研究者番号：20381733